

# 万葉挽歌詠の作者と場

松尾 光

## 一、はじめに

財団法人奈良県万葉文化振興財団万葉古代学研究所・第二回主宰共同研究は、平成17・18年度の二年にわたり「古代儀礼と万葉集」をテーマとして行なわれた。そのおもな目的は、古代儀礼のなかでもとくに万葉集の挽歌の特質をきわめることである。挽歌の発生を国際的な観点から幅広く検討するとともに、学際的な協力をえながら調査し、それらの作業を通じて万葉集の挽歌がどの程度普遍的でありまたどのように特徴的なものなのかを浮き彫りにする。この目的のプロジェクトにおいて、歴史の立場からなにを検討すべきか。いろいろな切り口を想定してみたが、成果をあげられる見込みが立たない。そのなかで、史料不足のために課題として設定することすらためられるが、挽歌を捧げる場の人物像、なかでも葬儀の当日に挽歌を捧げた人の人物像に焦点をあてて考察することとした。

## 二、万葉挽歌の用例と作者

『万葉集』には挽歌とされる歌が238首ほどあるが、作者のわかるものはそう多くない。<sup>(1)</sup>以下、歌番号順に検討していくこととする。

### 1. 後岡本宮御宇天皇代 [天豊財重日足姫天皇讓位後即後岡本宮]

有間皇子自傷結松枝歌二首

岩代の浜松が枝を引き結びま幸くあらばまた帰り見む  
家があれば筥に盛る飯を草枕旅にしあれば椎の葉に盛る

長忌寸意吉麻呂見結松哀咽歌二首

岩代の岸の松が枝結びけむ人は帰りてまた見けむかも  
岩代の野中に立てる結び松心も解けずいにしへ思ほゆ[未詳]

山上臣憶良追和歌一首

鳥翔成あり通ひつつ見らめども人こそ知らね松は知るらむ

右件歌等雖不挽柩之時所作准擬歌意 故以載于挽歌類焉

大宝元年辛丑幸于紀伊国時見結松歌一首[柿本朝臣人麻呂歌集中出也]

後見むと君が結べる岩代の小松がうれをまたも見むかも(巻二・141～146)

上記の歌は、有間皇子の謀反計画にかかわる。有間皇子は処刑されるのを覚悟し、松をみて自傷歌詠んだ。このときの自傷歌を知っていた長意吉麻呂がずっと前に死没した有間皇子を偲んで詠み、それに追和して柿本人麻呂が作歌したものである。処刑場での辞世の句の一場面の前の詠歌だが、処刑場での挽歌詠は許されなかった。そこではるか後年の人が捧げた挽歌詠とし、公開された場でのものとしなかったのであろう。

### 2. 近江大津宮御宇天皇代[天命開別天皇諡曰天智天皇]

天皇聖躬不予之時太后奉御歌一首

天の原振り放け見れば大君の御寿は長く天足らしたり

一書曰近江天皇聖躬不予御病急時太后奉獻御歌一首

青旗の木幡の上を通ふとは目には見れども直に逢はぬかも

天皇崩後之時倭太后御作歌一首

人はよし思ひやむとも玉葛影に見えつつ忘れぬかも

天皇崩時婦人作歌一首 [姓氏未詳]

うつせみし 神に堪へねば 離れ居て 朝暎く君 放り居て 我が恋ふる君 玉ならば 手に巻き持ちて 衣ならば 脱く時もなく 我が恋ふる 君ぞ昨夜 夢に見えつる

天皇大殯之時歌二首

かからむとかねて知りせば大御船泊てし泊りに標結はましを[額田王]

やすみしし我ご大君の大御船待ちか恋ふらむ志賀[舍人吉年]

大后御歌一首

鯨魚取り 近江の海を 沖放けて 漕ぎ来る船 辺附きて 漕ぎ来る船 沖つ權 いたくな撥ねそ 辺つ權 いたくな撥ねそ 若草の 夫の 思ふ鳥立つ

石川夫人歌一首

ささ浪の大山守は誰がためか山に標結ふ君もあらなくに

従山科御陵退散之時額田王作歌一首

やすみしし わご大君の 畏きや 御陵仕ふる 山科の 鏡の山に 夜はも 夜のことごと 昼はも 日のことごと 哭のみを 泣きつつ在りてや 百磯城の 大宮人は 去き別れなむ

(巻二・147～155)

上記の歌は、天智天皇の不予から死没・大殯・埋葬までの過程での挽歌で、いずれも対象は天智天皇である。不予の時点では大后・倭姫王が、死没時には大后と姓氏未詳の婦人が挽歌を捧げた。ついで大殯の場では額田姫王と舍人吉年および大后・石川夫人が、御陵退散の時には額田姫王が歌を詠んでいる。舍人吉年は男性的な名だが、「衣手に取りとどこほり泣く児にもまされるわれを置きて如何にせむ」(巻四-492)を大宰府に赴任する官人の田部忌寸櫛子に贈答していることからすると、女性であろう。ただし舍人吉年もそうだが、額田姫王も妻妾の一員というわけではなく、<sup>(2)</sup>後宮の女性たちの気持ちを代表してその立場で歌を作ったものと思われる。

### 3. 明日香清御原宮御宇天皇代 [天淳中原瀛真人天皇諡曰天武天皇]

十市皇女薨時高市皇子尊御作歌三首

みもろの神の神杉已具耳矣自得見監乍共寝ぬ夜ぞ多き

三輪山の山辺真麻木綿短か木綿かくのみからに長くと思ひき

山吹の立ちよそひたる山清水汲みに行かめど道の知らなく

紀曰七年戊寅夏四月丁亥朔癸巳十市皇女卒然病發薨於宮中(巻二・156～158)

これらは、高市皇子が十市皇女に捧げた挽歌である。高市皇子はこの歌のために、異母姉(妹)・十市皇女と恋愛関係にあったとされている。<sup>(3)</sup>しかし十市皇女は天武天皇の子のなかでは第一子か第二子かにあたり、かつ夫・大友皇子は戦没している。子・葛野王は十歳くらいでしかなく、挽歌を作ることがむずかしい。挽歌を捧げるべき適任者が見あたらないなかで、天武天皇の第二子(第一子)として、第一子(第二子)を見送る歌を詠むよう依頼されても不可解でない。

### 4. 天皇崩之時大后御作歌一首

やすみしし 我が大君の 夕されば 見したまふらし 明け来れば 問ひたまふらし 神岳の 山の黄葉を 今日もかも 問ひたまはまし 明日もかも 見したまはまし その山を 振り放け見つつ 夕されば あやに悲しみ 明け来れば うらさび暮らし 荒栲の 衣の袖は 干る時もなし

一書曰天皇崩之時太上天皇御製歌二首

燃ゆる火も取りて包みて袋には入ると言はずやも智男雲

北山にたなびく雲の青雲の星離り行き月を離れて

天皇崩之後八年九月九日奉為御齋會之夜夢裏習賜御歌一首 古歌集中出

明日香の 清御原の宮に 天の下 知らしめしし やすみしし 我が大君 高照らす 日の御子  
いかさまに 思ほしめせか 神風の 伊勢の国は 沖つ藻も 靡みたる波に 潮気のみ  
香れる国に 味凝り あやにともしき 高照らす 日の御子（卷二・159～162）

最初のは天武天皇の没時で、次のは死没から足かけ八年後の持統天皇七年九月十日に行われた無遮会での、それぞれ持統天皇の挽歌である。持統天皇は、太上天皇としてではなく、天武天皇の嫡妻として挽歌を捧げたのであろう。

5. 藤原宮御宇天皇代[高天原広野姫天皇天皇元年丁亥十一年讓位輕太子尊号曰太上天皇]

大津皇子薨之後大來皇女從伊勢齋宮上京之時御作歌二首

神風の伊勢の国にもあらましを何しか来けむ君もあらなくに  
見まく欲り我がする君もあらなくに何しか来けむ馬疲るるに  
移葬大津皇子屍於葛城二上山之時大來皇女哀傷御作歌二首  
うつそみの人にある我れや明日よりは二上山を弟背と我が見む  
磯の上に生ふる馬酔木を手折らめど見すべき君が在りと言はなくに

右一首今案不似移葬之歌 盖疑從伊勢神宮還京之時路上見花感傷哀咽作此歌乎

（卷二・163～166）

二首は、大津皇子の死を知った同母姉・大來皇女が、大津皇子を偲んで詠んだもの。あとの二首は亡骸を二上山麓から山頂に移葬したときの歌とされているが、うち一首は「移葬の歌として似つかわしくない」との左注があって、伊勢神宮から京への帰途に詠んだものかとされている。『日本書紀』持統称制前紀には「妃皇女山辺、髪を被して徒跣にして、奔り赴きて殉ぬ。見る者皆歎歎く」とあり、大津皇子の没時に彼の妻・山辺皇女も殉死した。これにより、大津皇子に挽歌を捧げうるのは同母姉の大來皇女しかなくなったようだ。

6. 日並皇子尊殯宮之時柿本朝臣人麻呂作歌一首并短歌

天地の 初めの時 ひさかたの 天の河原に 八百万 千万神の 神集ひ 集ひいまして  
神分り 分りし時に 天照らす 日女の命[一云 さしのほる 日女の命] 天をば 知らしめ  
めすと 葦原の 瑞穂の国を 天地の 寄り合ひの極み 知らしめす 神の命と 天雲の  
八重かき別きて[一云 天雲の八重雲別きて] 神下し いませまつりし 高照らす 日の御  
子は 飛ぶ鳥の 清御原の宮に 神ながら 太敷きまして すめろきの 敷きます国と 天  
の原 岩戸を開き 神上り 上りいましぬ [一云 神登り いましにしかば] 我が大君  
皇子の命の 天の下 知らしめしせば 春花の 貴くあらむと 望月の 満しけむと 天の  
下[一云 食す国 四方の人の 大船の 思ひ頼みて 天つ水 仰ぎて待つに いかさまに  
思ほしめせか つれもなき 真弓の岡に 宮柱 太敷きいまし みあらかを 高知りまして  
朝言に 御言問はさぬ 日月の 数多くなりぬれ そこ故に 皇子の宮人 ゆくへ知らずも  
[一云 さす竹の 皇子の宮人 ゆくへ知らにす]

反歌二首

ひさかたの天見のごとく仰ぎ見し皇子の御門の荒れまく惜しも  
あかねさす日は照らせれどぬばたまの夜渡る月の隠らく惜しも

[或本以件歌為後皇子尊殯宮之時歌反也]

或本歌一首

島の宮まがりの池の放ち鳥人目に恋ひて池に潜かず

皇子尊宮舎人等働傷作歌廿三首

高照らす我が日の御子の万代に国知らさまし島の宮はも  
島の宮上の池なる放ち鳥荒びな行きそ君座さずとも  
高照らす我が日の御子のいましせば島の御門は荒れずあらましを  
外に見し真弓の岡も君座せば常つ御門と侍宿するかも  
夢にだに見ずありしものをおほほしく宮出もするかさ松の隈廻を  
天地とともに終へむと思ひつつ仕へまつりし心違ひぬ  
朝日照る佐田の岡辺に群れ居つつ我が泣く涙やむ時もなし  
み立たしの島を見る時にはたづみ流るる涙止めぞかねつる  
橋の島の宮には飽かぬかも佐田の岡辺に侍宿しに行く  
み立たしの島をも家と棲む鳥も荒びな行きそ年かはるまで  
み立たしの島の荒穢を今見れば生ひざりし草生ひにけるかも  
鳥座立て飼ひし雁の子巢立ちなば真弓の岡に飛び帰り来ね  
我が御門千代とことばに榮えむと思ひてありし我れし悲しも  
東のたぎの御門に侍へど昨日も今日も召す言もなし  
水伝ふ磯の浦廻の岩つつじ茂く咲く道をまたも見むかも  
一日には千たび参りし東の大き御門を入りかてぬかも  
つれもなき佐田の岡辺に帰り居ば島の御階に誰れか住まはむ  
朝ぐもり日の入り行けばみ立たしの島に下り居て嘆きつるかも  
朝日照る島の御門におほほしく人音もせねばまうら悲しも  
真木柱太き心はありしかどこの我が心鎮めかねつも  
けころもを時かたまけて出でましし宇陀の大野は思ほえむかも  
朝日照る佐田の岡辺に泣く鳥の夜哭きかへらふこの年ころを  
畑子らが夜昼といはず行く道を我れはことごと宮道にぞする

右日本紀曰 三年己丑夏四月癸未朔乙未薨（卷二・167～193）

これらは、日並皇子尊すなわち草壁皇子の死没にあたって詠まれた挽歌群である。詠んだのは柿本人麻呂と皇子宮に奉仕した舎人23人であった。子・珂瑠皇子は年少でむりとしても、妻・阿陪皇女（元明天皇）や母・持統天皇が存命である。ほかの例からすれば、彼女らのうちでは妻が詠むべきだった。それにもかかわらず、姻戚の挽歌がなく、人麻呂・舎人の挽歌のみが載せられている。「人麻呂・舎人の歌とはべつに阿陪皇女らが挽歌を詠んだが、それらは採られなかった」ともいえるが、そうでなかろう。挽歌を通覧すると、大王並みに見送らせるために人麻呂らに代行させたもの、とみなしうるようだ。持統天皇らが草壁皇子を天皇並に扱おうとする企図を、特殊な扱いのなかに窺うことができる。

7. 柿本朝臣人麻呂献泊瀬部皇女忍坂部皇子歌一首并短歌

飛ぶ鳥の 明日香の川の 上つ瀬に 生ふる玉藻は 下つ瀬に 流れ触らばふ 玉藻なす  
か寄りかく寄り 靡かひし 孀の命の たたなづく 柔肌すらを 剣太刀 身に添へ寝ねば  
ぬばたまの 夜床も荒るらむ[一云 荒れなむ] そこ故に 慰めかねて けだしくも 逢ふ  
やと思ひて[一云 君も逢ふやと] 玉垂の 越智の大野の 朝露に 玉藻はひづち 夕霧に

衣は濡れて 草枕 旅寝かもする 逢はぬ君故

反歌一首

敷栲の袖交へし君玉垂の越智野過ぎ行くまたも逢はめやも[一云 越智野に過ぎぬ]

右或本曰 葬河嶋皇子越智野之時 献泊瀬部皇女歌也 日本紀云朱鳥五年辛卯秋九月己巳朔丁丑浄大參皇子川嶋薨 (卷二・194～195)

「或本」によれば、川島皇子を越智野に葬ったとき、泊瀬部皇女が歌ったとある。ともに天武天皇の皇子女だが、泊瀬部皇女は穴人大麻呂の娘・櫛媛娘の子。川島皇子は忍海小龍の娘・色夫古娘の子であり、客観的にみれば両者にさしたる接点はない。異母姉妹として兄に挽歌を捧げたとも思えず、同格の皇子女として婚姻関係にあったとするのが穏当だろう。そうとすれば、正妻が夫に挽歌を捧げた例となる。

題詞には柿本人麻呂が泊瀬部皇女・忍坂部皇子に捧げたとあるが、すくなくとも泊瀬部皇女は宮廷歌人と目される人麻呂に歌を献上されるほどの地位にいないと思われる。

8. 明日香皇女木甕殯宮之時柿本朝臣人麻呂作歌一首并短歌

飛ぶ鳥の 明日香の川の 上つ瀬に 石橋渡し[一云 石なみ] 下つ瀬に 打橋渡す 石橋に[一云 石なみに] 生ひ靡ける 玉藻もぞ 絶ゆれば生ふる 打橋に 生ひををれる 川藻もぞ 枯るれば生ゆる なにしかも 我が大君の 立たせば 玉藻のまころ 臥やせば 川藻のごとく 靡かひし 宜しき君が 朝宮を 忘れたまふや 夕宮を 背きたまふや うつそみと 思ひし時に 春へは 花折りかざし 秋立てば 黄葉かざし 敷栲の 袖たづさはり 鏡なす 見れども飽かず 望月の いやめづらしみ 思ほしし 君と時々 出でまして 遊びたまひし 御食向ふ 城上の宮を 常宮と 定めたまひて あぢさはふ 目言も絶えぬ しかれかも[一云 そこをしも] あやに悲しみ ぬえ鳥の 片恋づま[一云 しつつ] 朝鳥の[一云 朝霧の] 通はす君が 夏草の 思ひ萎えて 夕星の か行きかく行き 大船の たゆたふ見れば 慰もる 心もあらず そこ故に 為むすべ知れや 音のみも 名のみも 絶えず 天地の いや遠長く 偲ひ行かむ 御名に懸かせる 明日香川 万代までには しきやし 我が大君の 形見かここを

短歌二首

明日香川しがらみ渡し塞かませば流るる水ものどにかあらまし[一云水の淀にかあらまし]  
明日香川明日だに[一云 さへ]見むと思へやも[一云 思へかも] 我が大君の御名忘れせぬ [一云 御名忘れぬ] (卷二・196～198)

題詞によれば、柿本人麻呂が明日香皇女に捧げた挽歌である。明日香皇女は天智天皇の皇女で、母は阿倍倉梯麻呂の娘・橘娘。同母弟に、新田部皇子がいる。夫は刑部親王で、彼は慶雲二年(705)に没している。明日香皇女は文武天皇四年(700)四月に没しているため、夫は存命中であった。亡夫・天武天皇に妻・持統天皇が挽歌を捧げた先掲の例を想起すれば、夫・刑部親王が妻・明日香皇女への挽歌を捧げて自然であろう。新田部皇子も同母弟として資格はあるが、夫が健在ならばその方が適任である。それなのに柿本人麻呂を挽歌の詠者として起用するのは、いささか不可解である。しかし『日本書紀』持統天皇八年(694)八月には、持統天皇が明日香皇女の田荘に行幸し、明日香皇女のために沙門百4口を度したとある。また没時にも文武天皇が使者を遣わして弔賻するなど、特別に待遇した形跡がある。これらの殊遇の延長線上に、没時の柿本人麻呂の挽歌詠があるのではなかろうか。

9. 高市皇子尊城上殯宮之時柿本朝臣人麻呂作歌一首并短歌

かけまくも ゆゆしきかも[一云 ゆゆしけれども] 言はまくも あやに畏き 明日香の

真神の原に ひさかたの 天つ御門を 畏くも 定めたまひて 神さぶと 磐隠ります や  
すみしし 我が大君の きこしめす 背面の国の 真木立つ 不破山超えて 高麗剣 和射  
見が原の 仮宮に 天降りいまして 天の下 治めたまひ[一云 掃ひたまひて] 食す国を  
定めたまふと 鶏が鳴く 東の国の 御いくさを 召したまひて ちはやぶる 人を和せと  
奉ろはぬ 国を治めと[一云 掃へと] 皇子ながら 任したまへば 大御身に 大刀取り佩  
かし 大御手に 弓取り持たし 御軍士を 率ひたまひ 整ふる 鼓の音は 雷の 声と聞  
くまで 吹き鳴せる 小角の音も[一云 笛の音は] 敵見たる 虎か吼ゆると 諸人の お  
びゆるまでに[一云 聞き惑ふまで] ささげたる 幡の靡きは 冬こもり 春さり来れば  
野ごとに つきてある火の[一云 冬こもり 春野焼く火の] 風の共 靡くがごとく 取り  
持てる 弓弭の騒き み雪降る 冬の林に[一云 木綿の林] つむじかも い巻き渡ると  
思ふまで 聞き畏く[一云 諸人の 見惑ふまでに] 引き放つ 矢の繁けく 大雪の 乱  
れて来れ[一云 霰なす そちより来れば] まつろはず 立ち向ひしも 露霜の 消なば消  
ぬべく 行く鳥の 争ふはしに[一云 朝霜の 消なば消とふに うつせみと 争ふはしに]  
渡会の 斎きの宮ゆ 神風に い吹き惑はし 天雲を 日の目も見せず 常闇に 覆ひ賜ひ  
て 定めてし 瑞穂の国を 神ながら 太敷きまして やすみしし 我が大君の 天の下  
申したまへば 万代に しかしもあらむと[一云 かくしもあらむと] 木綿花の 栄ゆる時  
に 我が大君 皇子の御門を[一云 刺す竹の 皇子の御門を] 神宮に 装ひまつりて 使  
はしし 御門の人も 白袴の 麻衣着て 埴安の 御門の原に あかねさす 日のことごと  
獣じもの い旬ひ伏しつつ ぬばたまの 夕になれば 大殿を 振り放け見つつ 鶉なす  
い旬ひ廻り 侍へど 侍ひえねば 春鳥の さまよひぬれば 嘆きも いまだ過ぎぬに 思  
ひも いまだ尽きねば 言さへく 百済の原ゆ 神葬り 葬りいまして あさよし 城上  
の宮を 常宮と 高く奉りて 神ながら 鎮まりましぬ しかれども 我が大君の 万代と  
思ほしめして 作らしし 香具山の宮 万代に 過ぎむと思へや 天のごと 振り放け見つ  
つ 玉たすき 懸けて偲はむ 畏かれども

#### 短歌二首

ひさかたの天知らしぬる君故に日月も知らず恋ひわたるかも

埴安の池の堤の隠り沼のゆくへを知らに舎人は惑ふ

(巻二・199～200)

高市皇子は壬申の乱にさいして陣頭に立って全軍の指揮を執ったことは著名な事実であり、持統天皇四年七月には太政大臣に任命されている。太政大臣は、天智天皇十年(671)一月に大友皇子が任命されている。そのときは事実上の一本化された後継者としての指名をうけたという意味であり、皇太子に立てられたに等しかった。高市皇子の場合も、長皇子ら皇位を継承する資格と十分に担いうる能力をもつ天武天皇系の諸皇子が明瞭にいたにもかかわらず、多くの反対の声を押さえきって持統天皇が即位した。持統天皇の横暴に対する皇子たちの反撥は強かったと思われ、それに配慮または譲歩といってもよい形で高市皇子の事実上の立太子が実現した。持統天皇としては、この措置によって持統天皇→高市皇子→軽皇子(文武天皇)へという皇位継承を覚悟したものである<sup>(4)</sup>。高市皇子はこのように持統天皇の治下でも殊遇された皇子であるから、柿本人麻呂が天皇にかわって挽歌を捧げても、受ける側・捧げる側ともに人選として穏当であつたらう。

#### 10. 或書反歌一首

哭沢の神社に三輪据ゑ祈れども我が大君は高日知らしぬ

右一首類聚歌林曰 檜隈女王怨泣澤神社之歌也 案日本紀云十年丙申秋七月辛丑朔庚戌

この歌は、宮廷などの公開されたまたは公式の場所で捧げられた挽歌でない。檜隈女王が泣澤神社を怨む理由も不明だが、高市皇子の死没となんらかの関係があるらしい。鹿持雅澄『万葉集古義』には「此王の姉妹などにや」とあるが、根拠となるような確証はない。泣澤神社の前などでの檜隈女王の個人的な述懐を込めた詠歌を、山上憶良『類聚歌林』が採った。それが『万葉集』編者によって接合されたものであろう。

## 1 1. 但馬皇女薨後穂積皇子冬日雪落遥望御墓悲傷流涕御作歌一首

降る雪はあはにな降りそ吉隠の猪養の岡の塞なさまくに

冬の雪が降る日に、穂積皇子が但馬皇女の墓を遙かに望み、悲傷流涕して詠んだ作とされている。

但馬皇女は藤原鎌足の娘・氷上娘を母とする天武天皇の皇女であり、穂積皇子の異母妹にあたる。『万葉集』の題詞によれば、但馬皇女は「高市皇子の宮に在せる時」(巻二・116)とあるから、高市皇子の妻、身分的にみておそらく嫡妻である。にもかかわらず「窃かに穂積親王に接ひき。事既にあらはれて御作歌一首」(同上)とあり、この関係は好ましからざる恋愛関係と見られていたようだ。そのために公開された場で挽歌を披露できず、時を過ぎた遙かに場を離れたところでの詠歌となったのであろう。

## 1 2. 弓削皇子薨時置始東人作歌一首并短歌

やすみしし 我が大君 高照らす 日の御子 ひさかたの 天つ宮に 神ながら 神といま  
せば そこをしも あやに畏み 昼はも 日のことごと 夜はも 夜のことごと 伏し居嘆  
けど 飽き足らぬかも

反歌一首

大君は神にしませば天雲の五百重が下に隠りたまひぬ

又短歌一首

楽浪の志賀さざれ波しくしくに常にと君が思ほせりける (巻二・204～206)

天武天皇三年七月に没した弓削皇子に対して、置始東人が捧げた挽歌である。弓削皇子には同母兄に長皇子がおり、長皇子が挽歌を捧げるのにふさわしい。長皇子は和銅八年(715)六月に没するので、すでに没していたために長皇子が詠めなかったのかもしれない。しかしおそらくは、勅命によって弓削皇子の挽歌を置始東人が詠んだのであろう。東人は持統天皇の行幸にも供奉する著名な宮廷歌人であって、反歌に「大君は神にしませば」の語句も用いている。この詩句が用いられたのは、歌人としての東人の立場のせいであり、またその挽歌をうける弓削皇子の身分の高さに起因する。ことさらに宮廷歌人が送り込まれて、天皇の代役として挽歌が詠まれたのであろう。

## 1 3. 柿本朝臣麻呂妻死之後泣血哀慟作歌二首并短歌

天飛ぶや 軽の道は 我妹子が 里にしあれば ねもころに 見まく欲しけど やまず行か  
ば 人目を多み 数多く行かば 人知りぬべみ さね葛 後も逢はむと 大船の 思ひ頼み  
て 玉かざる 岩垣淵の 隠りのみ 恋ひつつあるに 渡る日の 暮れぬるがごと 照る月  
の 雲隠るごと 沖つ藻の 靡きし妹は 黄葉の 過ぎて去にきと 玉梓の 使の言へば  
梓弓 音に聞きて[一云 言はむすべ 為むすべ知らに 音のみを 聞きてありえねば 我  
が恋ふる 千重の一重も 慰もる 心もありやと 我妹子が やまず出で見し 軽の市に  
我が立ち聞けば 玉たすき 畝傍の山に 鳴く鳥の 声も聞こえず 玉梓の 道行く人も  
ひとりだに 似てし行かねば すべをなみ 妹が名呼びて 袖ぞ振りつる[或本有謂之 名  
のみを聞きてありえねば][句]

短歌二首

秋山の黄葉を茂み惑ひぬる妹を求めむ山道知らずも[一云 道知らずして]

黄葉の散りゆくなへに玉梓の使を見れば逢ひし日思ほゆ

うつせみと 思ひし時に[一云 うつそみと 思ひし] 取り持ちて 我がふたり見し 走出  
の 堤に立てる 槻の木の こちごちの枝の 春の葉の 茂きがごとく 思へりし 妹には  
あれど 頼めりし 子らにはあれど 世間を 背きしえねば かぎるひの 燃ゆる荒野に  
白栲の 天領巾隠り 鳥じもの 朝立ちいまして 入日なす 隠りにしかば 我妹子が 形  
見に置ける みどり子の 乞ひ泣くごとに 取り与ふ 物しなければ 男じもの 脇ばさみ  
持ち 我妹子と ふたり我が寝し 枕付く 妻屋のうちに 昼はも うらさび暮らし 夜は  
も 息づき明かし 嘆けども 為むすべ知らに 恋ふれども 逢ふよしをなみ 大鳥の 羽  
がひの山に 我が恋ふる 妹はいますと 人の言へば 岩根さくみて なづみ来し よけく  
もぞなき うつせみと 思ひし妹が 玉かぎる ほのかにだにも 見えなく思へば

短歌二首

去年見てし秋の月夜は照らせれど相見し妹はいや年離る

衾道を引手の山に妹を置きて山道を行けば生けりともなし

或本歌曰

うつそみと 思ひし時に たづさはり 我がふたり見し 出立の 百枝槻の木 こちごちに  
枝させると 春の葉の 茂きがごとく 思へりし 妹にはあれど 頼めりし 妹にはあれ  
ど 世間を 背きしえねば かぎるひの 燃ゆる荒野に 白栲の 天領巾隠り 鳥じもの  
朝立ちい行き 入日なす 隠りにしかば 我妹子が 形見に置ける みどり子の 乞ひ泣  
くごとに 取り与ふ 物しなければ 男じもの 脇ばさみ持ち 我妹子と 二人我が寝し  
枕付く 妻屋のうちに 昼はうらさび暮らし 夜は 息づき明かし 嘆けども 為むすべ知  
らに 恋ふれども 逢ふよしをなみ 大鳥の 羽がひの山に 汝が恋ふる 妹はいますと  
人の言へば 岩根さくみて なづみ来し よけくもぞなき うつそみと 思ひし妹が 灰に  
てませば

短歌三首

去年見てし秋の月夜は渡れども相見し妹はいや年離る

衾道を引手の山に妹を置きて山道思ふに生けるともなし

家に来て我が屋を見れば玉床の外に向きけり妹が木枕 (巻二・207～216)

14. 吉備津采女死時柿本朝臣人麻呂作歌一首并短歌

秋山の したへる妹 なよ竹の とをよる子らは いかさまに 思ひ居れか 栲縄の 長き  
命を 露こそば 朝に置きて 夕は 消ゆといへ 霧こそば 夕に立ちて 朝は 失すとい  
へ 梓弓 音聞く我れも おほに見し こと悔しきを 敷栲の 手枕まきて 劍太刀 身に  
添へ寝けむ 若草の その孺の子は 寂しみか 思ひて寝らむ 悔しみか 思ひ恋ふらむ  
時ならず 過ぎにし子らが 朝露のごと 夕霧のごと

短歌二首

楽浪の志賀津の子らが[一云 志賀の津の子が]罷り道の川瀬の道を見れば寂しも

そら数ふ大津の子が逢ひし日におほに見しかば今ぞ悔しき (巻二・217～219)

15. 讃岐狭岑嶋視石中死人柿本朝臣人麻呂作歌一首并短歌

玉藻よし 讃岐の国は 国からか 見れども飽かぬ 神からか ここだ貴き 天地 日月と



ともに 足り行かむ 神の御面と 継ぎ来る 那珂の港ゆ 船浮けて 我が漕ぎ来れば 時  
つ風 雲居に吹くに 沖見れば とみ波立ち 辺見れば 白波騒く 鯨魚取り 海を畏み  
行く船の 梶引き折りて をちこちの 島は多けど 名ぐはし 狭岑の島の 荒磯面に 廬  
りて見れば 波の音の 繁き浜辺を 敷栲の 枕になして 荒床に ころ臥す君が 家知ら  
ば 行きても告げむ 妻知らば 来も問はましを 玉杵の 道だに知らず おほほしく 待  
ちか恋ふらむ はしき妻らは

反歌二首

妻もあらば摘みて食べまし沙弥の山野の上のうはぎ過ぎにけらずや

沖つ波来寄る荒磯を敷栲の枕とまきて寝せる君かも (巻二・220~222)

16. 柿本朝臣人麻呂在石見国臨死時自傷作歌一首

鴨山の岩根しまける我れをかも知らにと妹が待ちつつあるらむ (巻二・223)

17. 柿本朝臣人麻呂死時妻依羅娘子作歌二首

今日今日と我が待つ君は石川の貝に[一云 谷に] 交りてありといはずやも

直の逢ひは逢ひかつましじ石川に雲立ち渡れ見つつ偲はむ

丹比真人[名闕]擬柿本朝臣人麻呂之意報歌一首

荒波に寄り来る玉を枕に置き我れここにありと誰れか告げなむ

或本歌曰

天離る鄙の荒野に君を置きて思ひつつあれば生けるともなし

右一首歌作者未詳 但古本以此歌載於此次也 (巻二・224~227)

18. 柿本朝臣人麻呂見香具山屍悲働作歌一首

草枕旅の宿りに誰が孀か国忘れたる家待たまくに

田口廣麻呂死之時刑部垂麻呂作歌一首

百足らず八十隈坂に手向けせば過ぎにし人にけだし逢はむかも (巻三・426)

19. 土形娘子火葬泊瀬山時柿本朝臣人麻呂作歌一首

こもりくの初瀬の山の山の際にいさよふ雲は妹にかもあらむ (巻三・427)

20. 溺死出雲娘子火葬吉野時柿本朝臣人麻呂作歌二首

山の際ゆ出雲の子らは霧なれや吉野の山の嶺にたなびく

八雲さす出雲の子らが黒髪は吉野の川の沖になづさふ (巻三・428~429)

上記の歌は柿本人麻呂関係の歌なので、まとめて解説する。13は妻を喪ったときに捧げた「泣血哀働」歌といわれる作品。14は吉備津采女に捧げた歌だが、采女は後宮に奉仕する天皇直属の女性である。臣下としては個人的に挽歌を詠んで捧げられる立場になりえないから、天皇の命令をうけて、天皇に代わって作歌したのであろう。20も出雲娘子と出雲国の名を負っているから、采女であろうか。19は出身・経歴とも不明だが、「土形娘子」も采女かもしれない。15・18は「讃岐狭岑嶋視石中死人」「香具山屍」に対する歌で、人麻呂との関係は明瞭でない。一般的な行路死人への哀悼歌である。16は人麻呂が石見国にあってまさに死に臨む時に自傷して作る歌とあり、自作自演の設定である。自分に対する挽歌を自作するという設定は、ふつうに作れるものでない。歌を作らんがための作歌であろう。17は、13とは異なる妻・依羅娘子が、夫である人麻呂に捧げた挽歌である。ツマは愛人というほどの意味であるから、同時にその立場の人が数人いるとしても不可解でない。

21. 和銅四年歳次辛亥河辺宮人姫嶋松原見嬢子屍悲嘆作歌二首

妹が名は千代に流れむ姫島の小松がうれに蘿生すまでに

難波瀉潮干なありそね沈みにし妹が姿を見まく苦しも (巻二・228～229)

これは、和銅四年に河辺宮人が姫島を訪れ、そこで松原嬢子の屍を見て悲しんで捧げた挽歌である。ところで、同じ場で詠まれたと思われる歌が後段に出てくる。

和銅四年辛亥河邊宮人見姫嶋松原美人屍哀慟作歌四首

風早の美穂の浦廻の白つつじ見れども寂しなき人思へば[或云 見れば悲しもなき人思ふに]  
みつみつし久米の若子がい触れけむ磯の草根の枯れまく惜しも  
人言の繁きこのころ玉ならば手に巻き持ちて恋ひずあらましを  
妹も我れも清みの川の川岸の妹が悔ゆべき心は持たじ

右案 年紀并所處及娘子屍作歌人名已見上也 但歌辞相違是非難別因以累載於茲次焉  
(巻三・434～437)

とあり、作者・挽歌の対象となる人は同じであるが、歌がまったく異なる。姫島は淀川河口にあった嶋だが、その松原嬢子と河辺宮人との関係は明らかでない。妻とも記されていないので、おそらくは土地ほめなどと同一で、その地を代表する伝説的な美女に敬意を払って作った歌であろう。

2.2. 霊亀元年歳次乙卯秋九月志貴親王薨時作歌一首并短歌

梓弓 手に取り持ちて ますらをの さつ矢手挟み 立ち向ふ 高円山に 春野焼く 野火  
と見るまで 燃ゆる火を 何かと問へば 玉鉦の 道來る人の 泣く涙 こさめに降れば  
白栲の 衣ひづちて 立ち留まり 我れに語らく なにしかも もとなとぶらふ 聞けば  
哭のみし泣かゆ 語れば 心ぞ痛き 天皇の 神の御子の いでましの 手火の光りぞ こ  
こだ照りたる

短歌二首

高円の野辺の秋萩いたづらに咲きか散るらむ見る人なしに  
御笠山野辺行く道はこきだくも繁く荒れたるか久にあらなくに

右歌笠朝臣金村歌集出

或本歌曰

高円の野辺の秋萩な散りそね君が形見に見つつ偲はむ  
御笠山野辺ゆ行く道こきだくも荒れにけるかも久にあらなくに (巻二・230～234)

霊亀元年(715)、笠金村が志貴皇子に捧げた挽歌である。志貴皇子の没年は、『続日本紀』に霊亀二年八月となっており、『万葉集』の誤記であろう。志貴皇子は天智天皇の第七子で、白壁王(光仁天皇)の父にあたる。「笠朝臣金村歌集」とあるから、詠者は金村とみてよい。金村が宮廷歌人として選ばれて、挽歌を詠んだとみられる。

2.3. 上宮聖徳皇子出遊竹原井之時見龍田山死人悲傷御作歌一首[小壘田宮御宇天皇代壘田宮御宇者豊御食炊屋姫天皇也諱額田諡推古]

家にあらば妹が手まかむ草枕旅に臥やせるこの旅人あはれ (巻三・415)

2.4. 過足柄坂見死人作歌一首

小垣内の 麻を引き干し 妹なねが 作り着せけむ 白栲の 紐をも解かず 一重結ふ 帯  
を三重結び 苦しきに 仕へ奉りて 今だにも 国に罷りて 父母も 妻をも見むと 思ひ  
つつ 行きけむ君は 鶏が鳴く 東の国の 畏きや 神の御坂に 和妙の 衣寒らに ぬば  
たまの 髪は乱れて 国問へど 国をも告らず 家問へど 家をも言はず ますらをの 行  
きのまにまに ここに臥やせる (巻九・1800)

2.5. 備後国神嶋浜調使首見屍作歌一首并短歌

玉梓の 道に出で立ち あしひきの 野行き山行き にはたづみ 川行き渡り 鯨魚取り  
海道に出でて 吹く風も おほには吹かず 立つ波も のどには立たぬ 畏きや 神の渡り  
の しき波の 寄する浜辺に 高山を 隔てに置いて 浦ぶちを 枕に巻きて うらもなく  
こやせる君は 母父が 愛子にもあらむ 若草の 妻もあらむと 家問へど 家道も言はず  
名を問へど 名だにも告らず 誰が言を いたはしとかも とみ波の 畏き海を 直渡りけ  
む

反歌

母父も妻も子どもも高々に来むと待つらむ人の悲しさ  
家人の待つらむものをつれもなき荒磯を巻きて寝せる君かも  
浦ぶちにこやせる君を今日今日と来むと待つらむ妻し悲しも

浦波の来寄する浜につれもなくこやせる君が家道知らずも (巻十三・3339～3343)

23は厩戸皇子(聖徳太子)の片岡山伝説をもとにしたもので、厩戸皇子が飢者に捧げた挽歌である。ただし厩戸皇子は用明天皇の皇子であり、尊貴な身分の人が一介の飢者に挽歌を捧げることはない。これはあくまでも伝説をもとにしたフィクションの詠歌である。24は足柄坂での、25は神嶋浜での、それぞれ行路死人に捧げた挽歌である。地霊に対する鎮魂的な意味合いがあるとすれば公開の場での詠歌となるが、かなり頻繁に見受けられた行路死人に対する私的な感慨だったかもしれない。しかしその場合は、どうして書き残されたかという過程に疑問が残るので、どちらかといえば公開の場での儀礼的な詠歌とみるのがよい。

26. 大津皇子被死之時磐余池陂流涕御作歌一首

百伝ふ磐余の池に鳴く鴨を今日のみ見てや雲隠りなむ

右藤原宮朱鳥元年冬十月

(巻三・416)

朱鳥元年(686)、大津皇子が持統天皇・草壁皇子ら政府首脳に対して謀反計画を立てた罪で処刑された。そのおりに大津皇子がみずからを悼んで詠んだ挽歌であり、いわば自傷歌である。処刑場では、刑死者に対して挽歌を捧げる場を提供しなかったようだ。そうした状況では、自傷歌しか詠めないわけである。

27. 河内王葬豊前国鏡山之時手持女王作歌三首

大君の和魂あへや豊国の鏡の山を宮と定むる

豊国の鏡の山の岩戸立て隠りにけらし待てど来まさず

岩戸破る手力もがも手弱き女にしあればすべの知らなく (巻三・417～419)

河内王・手持女王の系譜関係は、ともに不明である。確証はないものの、憶測すれば王・女王の対応関係にあるので、夫・妻の関係が考えられる。

28. 石田王卒之時丹生王作歌一首并短歌

なゆ竹の とをよる御子 さ丹つらふ 我が大君は こもりくの 初瀬の山に 神さびに  
斎きいますと 玉梓の 人ぞ言ひつる およづれか 我が聞きつる たはことか 我が聞き  
つるも 天地に 悔しきことの 世間の 悔しきことは 天雲の そくへの極み 天地の  
至れるまでに 杖つきも つかずも行きて 夕占問ひ 石占もちて 我が宿に みもろを立  
てて 枕辺に 斎瓮を据ゑ 竹玉を 間なく貫き垂れ 木綿たすき かひなに懸けて 天な  
る ささらの小野の 七節菅 手に取り持ちて ひさかたの 天の川原に 出で立ちて み  
そぎてましを 高山の 巖の上に いませつるかも

反歌

およづれのたはこととかも高山の巖の上に君が臥やせる

石上布留の山なる杉群の思ひ過ぐべき君にあらなくに (巻三・420～422)

29. 同石田王卒之時山前王哀傷作歌一首

つのはふ 磐余の道を 朝さらず 行きけむ人の 思ひつつ 通ひけまは 霍公鳥 鳴  
く五月には あやめぐさ 花橘を 玉に貫き[一云 貫き交へ] かづらにせむと 九月の  
しぐれの時は 黄葉を 折りかざさむと 延ふ葛の いや遠長く [一云 葛の根の いや  
遠長に] 万代に 絶えじと思ひて[一云 大船の 思ひたのみて] 通ひけむ 君をば明日  
ゆ[一云 君を明日ゆは] 外にかも見む (巻三・423)

右一首或云柿本朝臣人麻呂作

30. 或本反歌二首

こもりくの泊瀬娘が手に巻ける玉は乱れてありと言はずやも

川風の寒き泊瀬を嘆きつつ君が歩くに似る人も逢へや (巻三・424～425)

右二首者或云紀皇女薨後山前王代石田王作之也

28・29・30は、石田王・山前王が関係する歌なので一括して考えてみる。28は、丹生王が石田王に捧げた挽歌。29は、山前王が石田王に捧げた挽歌。30は、山前王が紀皇女に捧げた挽歌である。丹生王と石田王の関係は分からないが、「薬師寺縁起(醍醐寺本)」(藤田経世編『校刊美術史料 寺院編』上巻所収、中央公論美術出版刊)によると、

(忍カ)子、脱カ)

三品志壁 ———— 生三男 ———— 大野王 ———— 山前王 ———— 石田王

とあり、山前王は忍壁皇子(刑部親王)の子で、石田王の兄にあたっている。すなわち29は、弟・石田王の死没にさいして、兄の山前王が挽歌を詠んだものだ。ところが30では、山前王が石田王に代わって作歌したとわざわざことわっている。つまり紀皇女への挽歌はほんらい石田王が捧げるべきだというのが、挽歌を詠む場の諒解事項であった。それができなくなったので、断り書きをした上で、山前王が挽歌を詠んだものと知られる。その急な事情とは、石田王の死没であったろう。紀皇女は石田王の嫡妻であり、没後には夫が挽歌を詠むべきだった。だが石田王自身が罹病していて、しかも危篤の状態にあった。もとより山前王の嫡妻でない紀皇女への挽歌を、山前王がほんらい詠むべきでない。しかし該当者がおらず、義理の兄という縁故で山前王が挽歌を捧げた。その石田王はほどなく没して、山前王がふたたび挽歌を詠むこととなった、ということであろう。あるいは紀皇女に対して夫・石田王が挽歌を捧げようとしていたが、その直前に石田王が頓死したために、兄・山前王が急遽代って作詠したのであろう。

いずれにせよ「紀皇女の薨後、山前王、石田王に代はりて之を作る也」という注記からは、もともとだれがつまりどの立場の人が挽歌を詠むかについて、全員の納得できる人選のルールがすでに社会的に確立し、ほんらい詠むべき人が決まっていた。ここでは夫の立場にある石田王であった。夫が存命であるにもかかわらずその代理人(兄・山前王)が立つ場合は、それをあらかじめその場の人たちに知らせてことわっておく必要があった、という習慣が知られる。山前王は、義兄としての立場での作歌をしていない。内容は夫婦としての情感であり、ほんらい詠むべき夫(弟)に代わって詠んでいる。この場には、存命しているならばどうしても夫の歌(夫の立場での歌)が必要だったのである。

葬儀の場からの要請があつて捧げられた挽歌が筆録されているとなれば、つまり漫然と次々に詠まれていったもののうちから筆録者が秀作を適当に選別して書き留めたものではない。もし挽歌が漫然

と続けられていて、そのなかから適宜筆録していったのであれば、わざわざ「石田王に代はりて」という注記など必要がなかったろうからである。

「親しい姻戚関係の仲なので、たまたま夫の立場で作ってみたいになった」という軽々しい解釈を思いつくかもしれないが、厳粛な葬儀の場である。「みずからの妻であった」かのように装う戯れの心は、亡くなった紀皇女に対して失礼でもある。参列の人々に忌まわしい想像をかき立てさせるような言動は、いまでも許されることではあるまい。弟・石田王の死没があまりに近接していたか、または病床にある石田王の魂を込めて、代作したとみるのが穏当と思う。

### 3 1. 田口広麻呂死之時刑部垂麻呂作歌一首

百足らず八十隈坂に手向けせば過ぎにし人にけだし逢はむかも（巻三・427）

これは田口広麻呂の死没のさいに、刑部垂麻呂が捧げた挽歌である。「死」と書かれているので、庶民層の出身である。どうして『万葉集』に採られたのか、推測する根拠が示しづらい。右の諸例を参考にすれば、氏名にあたる部分が異なるので、女子を介した義理の兄弟関係などが予想できる。

### 3 2. 過勝鹿真間娘子墓時山部宿祢赤人作歌一首并短歌[東俗語云可豆思賀能麻末能豆胡]

いにしへに ありけむ人の 倭文幡の 帯解き交へて 伏屋立て 妻問ひしけむ 勝鹿の  
真間の手児名が 奥つ城を こことは聞けど 真木の葉や 茂くあるらむ 松が根や 遠く  
久しき 言のみも 名のみも我れは 忘らゆましじ

反歌

我れも見つ人にも告げむ勝鹿の真間の手児名が奥つ城とこ

葛飾の真間の入江にうち靡く玉藻刈りけむ手児名し思ほゆ（巻三・430～433）

### 3 3. 過葦屋処女墓時作歌一首[并短歌]

古への ますら壮士の 相競ひ 妻問ひしけむ 葦屋の 菟原娘子の 奥城を 我が立ち見  
れば 長き世の 語りにしつつ 後人の 偲ひにせむと 玉梓の 道の辺近く 岩構へ 造  
れる塚を 天雲の そくへの極み この道を 行く人ごとに 行き寄りて い立ち嘆かひ  
ある人は 哭にも泣きつつ 語り継ぎ 偲ひ継ぎくる 娘子らが 奥城処 我れさへに 見  
れば悲しも 古へ思へば

反歌

古への信太壮士の妻問ひし菟原娘子の奥城ぞこれ

語り継ぐからにもここだ恋しきを直目に見けむ古へ壮士（巻九・1801～1803）

### 3 4. 見菟原処女墓歌一首[并短歌]

葦屋の 菟原娘子の 八年子の 片生ひの時ゆ 小放りに 髪たくまでに 並び居る 家にも  
見えず 虚木綿の 隠りて居れば 見てしかと いぶせむ時の 垣ほなす 人の問ふ時  
茅渟壮士 菟原壮士の 伏屋焚き すすし競ひ 相よばひ しける時は 焼太刀の 手かみ  
押しねり 白真弓 鞞取り負ひて 水に入り 火にも入らむと 立ち向ひ 競ひし時に 我  
妹子が 母に語らく したたまき いやしき我が故 ますらをの 争ふ見れば 生けりとも  
逢ふべくあれや ししくしろ 黄泉に待たむと 隠り沼の 下延へ置きて うち嘆き 妹が  
去ぬれば 茅渟壮士 その夜夢に見 とり続き 追ひ行きければ 後れたる 菟原壮士い  
天仰ぎ 叫びおらび 地を踏み きかみたけびて もころ男に 負けてはあらじと 懸け佩  
きの 小太刀取り佩き ところづら 尋め行きければ 親族どち い行き集ひ 長き代に  
標にせむと 遠き代に 語り継がむと 娘子墓 中に造り置き 壮士墓 このもかのもに  
造り置ける 故縁聞きて 知らねども 新裳のごとも 哭泣きつるかも

反歌

芦屋の菟原娘子の奥城を行き来と見れば哭のみし泣かゆ  
墓の上の木の枝靡けり聞きしごと茅渟壮士にし寄りにけらしも

右五首高橋連虫麻呂之歌集中出 (巻九・1809~1811)

35. 詠勝鹿真間娘子歌一首[并短歌]

鶏が鳴く 東の国に 古へに ありけることと 今までに 絶えず言ひける 勝鹿の 真間  
の手児名が 麻衣に 青衿着け ひたさ麻を 裳には織り着て 髪だにも 搔きは梳らず  
杵をだに はかず行けども 錦綾の 中に包める 斎ひ子も 妹にしかめや 望月の 足れ  
る面わに 花のごと 笑みて立てれば 夏虫の 火に入るがごと 港入りに 舟漕ぐごとく  
行きかぐれ 人の言ふ時 いくばくも 生けらじものを 何すとか 身をたな知りて 波の  
音の 騒く港の 奥城に 妹が臥やせる 遠き代に ありけることを 昨日しも 見けむが  
ごとも 思ほゆるかも

反歌

勝鹿の真間の井見れば立ち平し水汲ましけむ手児名し思ほゆ (巻九・1807~08)

32・33・34・35は、21と同様で、その地域に伝わる美女・美談の伝説をもとにした、土地ほめを兼ねた挽歌であろう。

36. 神亀五年戊辰大宰帥大伴卿思恋故人歌三首

愛しき人のまきてし敷栲の我が手枕をまく人あらめや

右一首別去而経数句作歌

帰るべく時はなりけり都にて誰が手本をか我が枕かむ  
都なる荒れたる家にひとり寝ば旅にまさりて苦しかるべし

右二首臨近向京之時作歌 (巻三・438~440)

37. 悲傷膳部王歌一首

世間は空しきものとあらむとぞこの照る月は満ち欠けしける

右一首作者未詳 (巻三・442)

36は大伴旅人が故人を恋いしので詠んだ挽歌である。相互の関係はよくわからない。37は、対象は長屋王の子・膳部(膳夫)王に捧げた挽歌である。母は長屋王の嫡妻・吉備内親王で、長屋王の変にあたり、父母とともに処刑された。詠んだ人物がわからないが、歌の内容が愛をテーマとしていないので、僚友・従者などの男であろうか。刑死なので名前は伏せられ、公開された場での詠歌は披露できなかつたと見られる。とすれば、大伴氏の手元に残されていた史料だろうか。

38. 神亀六年己巳左大臣長屋王賜死之後倉橋部女王作歌一首

大君の命畏み大殯の時にはあらねど雲隠ります

倉橋部女王が、刑死した長屋王に捧げた挽歌である。倉橋部女王の系譜関係は不明瞭であるが、長屋王の娘(元暦本万葉集)・賀茂女王の歌(『万葉集』巻八-1613)の左注に「或は云ふ椋橋部女王、或は云ふ笠縫女王の作」などとあって、誤記を疑われるていどの範囲にいる人らしい。

39. 天平元年己巳攝津国班田史生丈部龍麻呂自経死之時判官大伴宿祢三中作歌一首并短歌

天雲の 向伏す国の ますらをと 言はれし人は 天皇の 神の御門に 外の重に 立ち待  
ひ 内の重に 仕へ奉りて 玉葛 いや遠長く 祖の名も 継ぎ行くものと 母父に 妻に  
子どもに 語らひて 立ちにし日より たらちねの 母の命は 斎瓮を 前に据ゑ置きて  
片手には 木綿取り持ち 片手には 和栲奉り 平けく ま幸くいませと 天地の 神を祈

ひ褥み いかにあらむ 年月日にか つつじ花 にはへる君が には鳥の なづさひ来むと  
立ちて居て 待ちけむ人は 大君の 命畏み おしてる 難波の国に あらたまの 年経る  
までに 白袴の 衣も干さず 朝夕に ありつる君は いかさまに 思ひませか うつせみ  
の 惜しきこの世を 露霜の 置きて去にけむ 時にあらずして

反歌

昨日こそ君はありしか思はぬに浜松の上に雲にたなびく

いつしかと待つらむ妹に玉梓の言だに告げず去にし君かも (巻三・443～445)

39は、攝津国班田史生丈部龍麻呂が自経して死んだときに、摂津国判官の職務にあった大伴三中が僚友として捧げた挽歌である。「いつしかと待つらむ妹に玉梓の言だに告げず去にし君かも」とあり、「いつしかと待つらむ妹」がいたようだし、親密でもない人が挽歌詠するのは上記諸例からすると異例で、公開された場で僚友が挽歌を捧げるにはふさわしくない。自殺であったために、家族のもとで公開された葬儀ができなかったとも考え得るが、おそらくは詠み手が大伴氏の族員であるために、密やかに偲んで詠んだ歌が残されたのであろう。公開の場で披露された挽歌ではないと思う。

40. 天平二年庚午冬十二月大宰帥大伴卿向京上道之時作歌五首

我妹子が見し鞆の浦のむろの木は常世にあれど見し人ぞなき  
鞆の浦の磯のむろの木見むごとに相見し妹は忘れぬやも  
磯の上に根延ふむろの木見し人をいづらと問はば語り告げむか

右三首過鞆浦日作歌

妹と来し敏馬の崎を帰るさにひとりし見れば涙ぐましも  
行くさにはふたり我が見しこの崎をひとり過ぐれば心悲しも[一云 見も放かず来ぬ]

右二首過敏馬崎日作歌

還入故郷家即作歌三首

人もなき空しき家は草枕旅にまさりて苦しかりけり  
妹としてふたり作りし我が山齋は木高く茂くなりけるかも  
我妹子が植ゑし梅の木見ると心に咽せつつ涙し流る (巻三・446～453)

いづれも、大伴旅人が大納言として帰京するさい、嫡妻を偲んでの詠歌である。妻は大宰府に赴任する夫・旅人と往路をともししていたが、大宰府で死没した。往路での亡妻のイメージに捧げた挽歌である。

41. 天平三年辛未秋七月大納言大伴卿薨之時歌六首

はしきやし栄えし君のいましせば昨日も今日も我を召さましを  
かくのみにありけるものを萩の花咲きてありやと問ひし君はも  
君に恋ひいたもすべなみ葦鶴の哭のみし泣かゆ朝夕にして  
遠長く仕へむものと思へりし君しまさねば心どもなし  
みどり子の匍ひたもとほり朝夕に哭のみぞ我が泣く君なしにして

右五首資人余明軍不勝犬馬之慕心中感緒作歌

42. 見れど飽かずいましし君が黄葉のうつりい行けば悲しくもあるか

右一首勅内礼正県犬養宿祢人上使檢護卿病 而医薬無驗逝水不留 因斯悲慟即作此歌

43. 七年乙亥大伴坂上郎女悲嘆尼理願死去作歌一首并短歌

栲づのの 新羅の国ゆ 人言を よしと聞かして 問ひ放くる 親族兄弟 なき国に 渡り  
来まして 大君の 敷きます国に うち日さす 都しみみに 里家は さはにあれども い

かさまに 思ひけめかも つれもなき 佐保の山辺に 泣く子なす 慕ひ来まして 敷栲の  
家をも作り あらたまの 年の緒長く 住まひつつ いまししものを 生ける者 死ぬとい  
ふことに 免れぬ ものにしあれば 頼めりし 人のことごと 草枕 旅なる間に 佐保川  
を 朝川渡り 春日野を そがひに見つつ あしひきの 山辺をさして 夕闇と 隠りまし  
ぬれ 言はむすべ 為むすべ知らに たもとほり ただひとりして 白栲の 衣袖干さず  
嘆きつつ 我が泣く涙 有間山 雲居たなびき 雨に降りきや

反歌

留めえぬ命にしあれば敷栲の家ゆは出でて雲隠りにき

右新羅国尼名日理願也 遠感王徳帰化聖 於時寄住大納言大將軍大伴卿家既逕数紀焉  
惟以天平七年乙亥忽沈運病既趣泉界 於是大家石川命婦依餌藥事 往有間温泉而不会此  
喪 但郎女独留葬送屍柩既訖 仍作此歌贈入温泉

4 4. 十一年己卯夏六月大伴宿祢家持悲傷亡妾作歌一首

今よりは秋風寒く吹きなむをいかにかひとり長き夜を寝む

弟大伴宿祢書持即和歌一首

長き夜をひとりや寝むと君が言へば過ぎにし人の思ほゆらくに

又家持見砌上瞿麦花作歌一首

秋さらば見つつ偲へと妹が植ゑしやどのなでしこ咲きにけるかも

移朔而後悲嘆秋風家持作歌一首

うつせみの世は常なしと知るものを秋風寒み偲ひつるかも

又家持作歌一首并短歌

我がやどに 花ぞ咲きたる そを見れど 心もゆかず はしきやし  
妹がありせば 水鴨なす ふたり並び居 手折りても 見せましものを  
うつせみの 借れる身なれば 露霜の 消ぬるがごとく あしひきの  
山道をさして 入日なす 隠りにしかば そこ思ふに 胸こそ痛き  
言ひもえず 名づけも知らず 跡もなき 世間であれば 為むすべもなし

反歌

時はしもいつもあらむを心痛くい行く我妹かみどり子を置きて  
出でて行く道知らませばあらかじめ妹を留めむ関も置かましを  
妹が見しやどに花咲き時は経ぬ我が泣く涙いまだ干なくに

悲緒未息更作歌五首

かくのみにありけるものを妹も我れも千年のごとく頼みたりけり  
家離りいます我妹を留めかね山隠しつれ心どもなし  
世間し常かくのみとかつ知れど痛き心は忍びかねつも  
佐保山にたなびく霞見のごとに妹を思ひ出泣かぬ日はなし  
昔こそ外にも見しか我妹子が奥つ城と思へばはしき佐保山

4 5. 十六年甲申春二月安積皇子薨之時内舍人大伴宿祢家持作歌六首

かけまくも あやに畏し 言はまくも ゆゆしきかも 我が大君 皇子の命 万代に 見し  
たまはまし 大日本 久迹の都は うち靡く 春さりぬれば 山辺には 花咲きををり 川  
瀬には 鮎子さ走り いや日異に 栄ゆる時に およづれの たはこととかも 白栲に 舍  
人よそひて 和東山 御輿立たして ひさかたの 天知らしぬれ 臥いまるび ひづち泣け



ども 為むすべもなし

反歌

我が大君天知らさむと思はねばおほにぞ見ける和東柚山  
あしひきの山さへ光り咲く花の散りぬるとき我が大君かも

右三首二月三日作歌

かけまくも あやに畏し 我が大君 皇子の命の もののふの 八十伴の男を 召し集へ  
率ひたまひ 朝狩に 鹿猪踏み起し 夕狩に 鶉雉踏み立て 大御馬の 口抑へとめ 御心  
を見し明らめし 活道山 木立の茂に 咲く花も うつろひにけり 世間は かくのみな  
らし ますらをの 心振り起し 剣太刀 腰に取り佩き 梓弓 鞆取り負ひて 天地と い  
や遠長に 万代に かくしもがもと 頼めりし 皇子の御門の 五月蠅なす 騒く舎人は  
白栲に 衣取り着て 常なりし 笑ひ振舞ひ いや日異に 変らふ見れば 悲しきろかも

反歌

はしきかも皇子の命のあり通ひ見しし活道の道は荒れにけり  
大伴の名に負ふ鞆帯びて万代に頼みし心いづくか寄せむ

右三首三月廿四日作歌

(巻三・454～480)

上記の歌は、公開された場で捧げられた挽歌ではなく、大伴氏のなかに蓄積されていた歌群であらう。

45によれば、「安積皇子薨之時内舎人大伴宿祢家持作歌」とあり、安積皇子が死没して、内舎人の立場で大伴家持が作歌したともうけとれる。しかしそのあとに「右三首二月三日作歌」「右三首三月廿四日作歌」とあって、連日の詠歌が並んでいる。安積皇子に対して挽歌を捧げられる場面が連日ありつづけるという事態は想像しがたい。これらは、自分の思いを書き留めておいた歌群にすぎない。そういう目で眺めると、42に「資人余明軍不勝犬馬之慕心中感緒作歌」とあるが、余明軍が資人として「不勝犬馬之慕心中感緒」を詠んだとしても、それを公開された葬儀の場で歌ったと考えなくてよい。これは大伴旅人に捧げられたために、大伴氏の手元に残されたと考えられる。43の「大伴坂上郎女悲嘆尼理願死去作歌」は尼理願の死去にあたり、大伴坂上郎女が悲嘆した内心の思いを書き留めたものである。しかし知人に過ぎなかったろう大伴坂上郎女には、挽歌を公開する立場ではなかった。44の「大伴宿祢家持悲傷亡妾作歌」は大伴家持の亡妾とあるから、大伴家持が悲傷して亡妾に捧げても立場としておかしくない。しかし大伴家持は当時22歳であって、相手の女性も正式な固定的な嫡妻と認められていなかったのではないか。

#### 46. 悲傷死妻高橋朝臣作歌一首并短歌

白栲の 袖さし交へて 靡き寝し 我が黒髪 の ま白髪に なりなむ極み 新世に とともに  
あらむと 玉の緒の 絶えじ妹と 結びてし ことは果たさず 思へりし 心は遂げず  
白栲の 手本を別れ にきびにし 家ゆも出でて みどり子の 泣くをも置きて 朝霧の  
おほになりつつ 山背の 相樂山の 山の際に 行き過ぎぬれば 言はむすべ 為むすべ知  
らに 我妹子と さ寝し妻屋に 朝には 出で立ち偲ひ 夕には 入り居嘆かひ 脇ばさむ  
子の泣くごとに 男じもの 負ひみ抱きみ 朝鳥の 哭のみ泣きつつ 恋ふれども 験をな  
みと 言とはぬ ものにはあれど 我妹子が 入りにし山を よすかとぞ思ふ

反歌

うつせみの世のことにあれば外に見し山をや今はよすかと思はむ  
朝鳥の哭のみし泣かむ我妹子に今またさらに逢ふよしをなみ (巻三・481～483)

右三首七月廿日高橋朝臣作歌也 名字未審 但云奉膳之男子焉

「悲傷死妻高橋朝臣作歌」とあるので、高橋朝臣が、夫として、死没した妻に悲傷する思いを込めて詠んだ挽歌である。

47. 宇治若郎子宮所歌一首

妹らがり今木の嶺に茂り立つ孀松の木は古人見けむ (巻九・1795)

48. 紀伊国作歌四首

黄葉の過ぎにし子らと携はり遊びし磯を見れば悲しも  
潮気立つ荒磯にはあれど行く水の過ぎにし妹が形見とぞ来し  
いにしへに妹と我が見しぬばたまの黒牛潟を見れば寂しも  
玉津島磯の浦廻の真砂にもほひて行かな妹も触れけむ

右五首柿本朝臣人麻呂之歌集出 (巻三・1796~1799)

47・48は、ともに「柿本朝臣人麻呂之歌集出」とある。人麻呂の作歌とは断定できないが、人麻呂の立場で詠んだと認めて「柿本朝臣人麻呂之歌集」に収めたのであろう。「宇治若郎子宮所歌」での立場は、応神天皇の子に捧げた挽歌である。48の4首は、紀伊国でのかつての愛人に捧げた挽歌である。これは愛人として、女性を見送る立場で詠まれている。

49. 哀弟死去作歌一首[并短歌]

父母が 成しのまにまに 箸向ふ 弟の命は 朝露の 消やすき命 神の共 争ひかねて  
葦原の 瑞穂の国に 家なみか また帰り来ぬ 遠つ国 黄泉の境に 延ふ蔦の おのが向  
き向き 天雲の 別れし行けば 闇夜なす 思ひ惑はひ 射ゆ鹿の 心を痛み 葦垣の 思  
ひ乱れて 春鳥の 哭のみ泣きつつ あぢさはふ 夜昼知らず かぎろひの 心燃えつつ  
嘆く別れを

反歌

別れてもまたも逢ふべく思はえば心乱れて我れ恋ひめやも[一云 心尽して]  
あしひきの荒山中に送り置きて帰らふ見れば心苦しも

右七首田辺福麻呂之歌集出 (巻九・1804~1806)

田辺福麻呂が、弟の死没にさいして捧げた挽歌である。妻・子がいればそれが適任者となるが、歌には妻・子らの思いが詠み込まれていない。それは、妻子にかわっての代作者という立場ではなかったことを意味する。おそらくは、夭死してひとり身だった。だから、生存中でもっとも近親の者として、挽歌を捧げたのであろう。

50. 到壺岐嶋雪連宅満忽遇鬼病死去之時作歌一首并短歌

天皇の 遠の朝廷と 韓国に 渡る我が背は 家人の 齋ひ待たねか 正身かも 過ちしけ  
む 秋去らば 帰りまさむと たらちねの 母に申して 時も過ぎ 月も経ぬれば 今日か  
来む 明日かも来むと 家人は 待ち恋ふらむに 遠の国 いまだも着かず 大和をも 遠  
く離りて 岩が根の 荒き島根に 宿りする君

反歌二首

岩田野に宿りする君家人のいづらと我れを問はばいかに言はむ  
世間は常かくのみと別れぬる君にやもとな我が恋ひ行かむ

右三首挽歌 (巻十五・3688~3690)

51. 天地と ともにもがもと 思ひつつ ありけむものを はしけやし 家を離れて 波の上へ  
なづさひ来にて あらたまの 月日も来経ぬ 雁がねも 継ぎて来鳴けば たらちねの 母

も妻らも 朝露に 裳の裾ひづち 夕霧に 衣手濡れて 幸くしも あるらむごとく 出で  
見つ 待つらむものを 世間の 人の嘆きは 相思はぬ 君にあれやも 秋萩の 散らへ  
る野辺の 初尾花 仮廬に葺きて 雲離れ 遠き国辺の 露霜の 寒き山辺に 宿りせるら  
む

反歌二首

はしけやし妻も子どもも高々に待つらむ君や島隠れぬる  
黄葉の散りなむ山に宿りぬる君を待つらむ人し悲しも

右三首葛井連子老作挽歌

(卷十五・3691～3693)

52. わたつみの 畏き道を 安けくも なく悩み来て 今だにも 喪なく行かむと 壱岐の海人  
の ほつての占部を 肩焼きて 行かむとするに 夢のごと 道の空路に 別れする君

反歌二首

昔より言ひけることの韓国のからくもここに別れするかも  
新羅へか家にか帰る壱岐の島行かむたどきも思ひかねつも

右三首六鯖作挽歌

(卷十五・3694～3696)

50・51・52は、いづれも雪宅満に関する歌である。50は、雪宅満が本人に対して詠んだ挽歌である。51は葛井子老、52は六人部鯖麻呂が作っている。雪宅満らが壱岐嶋に至ったとき、唐突に鬼病に罹って死没した。鬼病は恐ろしい病気という意味だが、伝染病たとえば天然痘でもあろうか。感染してから死去するまでにすこし間があったため、自分への挽歌が詠めたのである。雪宅満の歌のなかに「韓国に 渡る我が背は」「遠の国 いまだも着かず 大和をも 遠く離りて」とあり、六人部鯖麻呂の歌のなかにも「韓国」「新羅へか家にか帰る壱岐の島」とあるので、遣新羅使一行の随行者ではないか。遣新羅使一行とすれば、任務遂行が至上命令となるので、死者を船外に出して進むほかない。そうした場合、通常の立場の者が挽歌を捧げられるはずもない。家人・近親者が挽歌を詠むことはできず、その場にいる者だけで葬儀を執行し、挽歌を詠むこととなったのであろう。

53. 日本挽歌

蓋聞 四生起滅方夢皆空 三界漂流喩環不息 所以維摩大士在于方丈 有懷染疾之患 釈迦能仁坐於雙林 無免泥洹之苦 故知 二聖至極不能弘 力負之尋至 三千世界誰能逃黒闇之搜來 二鼠競走而度目之鳥旦飛 四蛇争侵而過隙之駒夕走 嗟乎痛哉 紅顏共三從長逝 素質与四德永滅 何因偕老違於要期 独飛生於半路 蘭室屏風徒張 斷腸之哀弥痛 枕頭明鏡空懸 染筠之淚逾落 泉門一掩 無由再見 嗚呼哀哉 愛河波浪已先滅 苦海煩惱亦無結 從來厭離此穢土 本願託生彼淨刹

日本挽歌一首

大君の 遠の朝廷と しらぬひ 筑紫の国に 泣く子なす 慕ひ来まして 息だにも いまだ休めず 年月も いまだあらねば 心ゆも 思はぬ間に うち靡き 臥やしぬれ 言はむすべ 為むすべ知らに 岩木をも 問ひ放け知らず 家ならば 形はあらむを 恨めしき 妹の命の 我れをばも いかにせよとか には鳥の ふたり並び居 語らひし 心背きて 家離りいます

反歌

家に行きていかに我がせむ枕付く妻屋寂しく思ほゆべしも  
はしきよしかくのみからに慕ひ来し妹が心のすべもすべなさ  
悔しかもかく知らませばあをによし国内ことごと見せましものを

妹が見し棟の花は散りぬべし我が泣く涙いまだ干なくに  
大野山霧立ちわたる我が嘆くおきその風に霧立ちわたる

神亀五年七月廿一日 筑前国守山上憶良上

(卷五・794～799)

この歌群は、亡妻に捧げた夫の筑前国守・山上憶良の挽歌である。797番歌までが葬儀の場での歌で、残りの2首が7月21日に詠まれた。となれば、公開・披露されたものをだれかが筆録したとしても、797番歌までしか残らないはずだった。それが残ったのは、両者計5首があわせられて、憶良からその上司にあたる大宰帥・大伴旅人に献上された。大伴氏のなかに蓄積されていたから、残りえたわけである。

#### 5.4. 古挽歌一首并短歌

夕されば 葦辺に騒ぎ 明け来れば 沖になづさふ 鴨すらも 妻とたぐひて 我が尾には  
霜な降りそと 白栲の 羽さし交へて うち掃ひ さ寝とふものを 行く水の 帰らぬごと  
く 吹く風の 見えぬがごとく 跡もなき 世の人にして 別れにし 妹が着せてし なれ  
衣 袖片敷きて ひとりかも寝む

反歌一首

鶴が鳴き葦辺をさして飛び渡るあなたづたづしひとりさ寝れば

右丹比大夫悽愴亡妻歌

(卷十五・3625～3626)

これは、丹比大夫が亡妻に捧げた挽歌であり、もっとも身近な近親者として詠んだもの。挽歌として典型的な例である。

#### 5.5. 挽歌一首并短歌

天地の 初めの時ゆ うつそみの 八十伴の男は 大君に まつろふものと 定まれる 官  
にしあれば 大君の 命畏み 鄙離る 国を治むと あしひきの 山川へだて 風雲に 言  
は通へど 直に逢はず 日の重なれば 思ひ恋ひ 息づき居るに 玉杵の 道來る人の 伝  
て言に 我れに語らく はしきよし 君はこのころ うらさびて 嘆かひいます 世間の  
憂けく辛けく 咲く花も 時にうつろふ うつせみも 常なくありけり たらちねの 母の  
命 何しかも 時はあらむを まそ鏡 見れども飽かず 玉の緒の 惜しき盛りに 立つ  
霧の 失せぬるごとく 置く露の 消ぬるがごとく 玉藻なす 靡き臥い伏し 行く水の  
留めかねつと たはことか 人の言ひつる およづれか 人の告げつる 梓弓 爪引く夜音  
の 遠音にも 聞けば悲しみ にはたづみ 流るる涙 留めかねつも

反歌二首

遠音にも君が嘆くと聞きつれば哭のみし泣かゆ相思ふ我れは

世間の常なきことは知るらむを心尽くすな大夫にして

右大伴宿祢家持弔聲南右大臣家藤原二郎之喪慈母患也(卷十九・4214～4216)

この左注は、いささか説明を要する。「南右大臣家」は藤原南家の豊成のことで、藤原二郎はその子の継縄のことである。その継縄の妻(名は不明)が大伴家持の娘であった。その継縄が「慈母」であった生母・路真人虫麻呂の娘を喪って悲嘆に暮れている。そこで大伴家持が「慈母を喪って思いとしている」継縄を岳父の立場から慰めつつ、彼の「慈母」に挽歌を捧げたのである。これはもとより公の場での詠歌でなく、継縄に個人的にもたらされた。こうしたやりとりの歌までが残されているのは、家持の手元に書き留められていたからである。

### 三、公私の場と作者との関係

以上一首ずつの検討をふまえ、総合的な所見を述べる。

『万葉集』の挽歌には、公開された場と私的な場で詠まれたものがある。公開された場の挽歌はおよそその場に居あわせた記録者が書き留めたもので、私的な場の挽歌は「柿本人麻呂歌集」(1,47,48)「類聚歌林」(10)を抜粋したり、大伴氏の手元などに残されていた史料(36~37,39,40~45,55)を収録したものであろう。

公開された場での挽歌詠は、基本的に夫が妻に(13,27,30,46,53,54)、妻が夫に(2,4,7,17)捧げる。それができないときには、同母・異母の兄弟姉妹の人が詠む(3,5,29,31,49)。逆縁になる関係、つまり父・母が子・孫の世代に捧げた挽歌はない。公開された葬儀の場で、誰が挽歌を捧げるのか。それは、その立場で決まっていたようである。

そのことは、石田王・山前王・紀皇女の関係で知られる。紀皇女への挽歌詠は、ほんらいだれがすべきものか、いわなくても決まっていた。通覧する限り、公開された場での挽歌詠の場合、これはどの人に対しても通じる、普遍的な通則と認められていた。このことは、今日の葬儀において、遺族を代表するただ一人の喪主が参列者全員に挨拶するのに似ている。もしこうした通則を破る場合は、代作と断らなければならなかった。代作とことわっているわけは、妻への挽歌詠は生きているならば夫とされていたため、山前王は夫の立場での挽歌を捧げたとみなされる。天智天皇への挽歌は、妻妾の立場にあるものがつぎつぎに捧げたものである(2)。しかし通常は、その適任の立場にある者だけが、公開された場で単独で詠むものだった。したがって公開された場での挽歌は、通常一首しか残されない。すなわち『万葉集』の挽歌は、詠まれた挽歌の一部がたまたま残っているのではなく、公開された葬儀の場での挽歌のすべてがこれだということである。

この例外となるのが、天智天皇への挽歌(2)と草壁皇子への挽歌(6)である。天智天皇には女性の舎人が挽歌を捧げたが、これは額田姫王とともに当時著名な歌人で、妻妾としての立場からの詠歌の例と考えればよい。草壁皇子への23人の舎人たち挽歌詠は、特異である。臆測を逞しくすれば、草壁皇子の葬儀を天皇(大王)のそれに擬えさせるために異例の設定をしたのでないか。天皇の葬儀ならば殯の場で誄があげられるが、即位はもとより立太子式も法制化されていないなかで、草壁皇子については天皇に準ずるような儀礼がなにもできなかった。ふつうの皇子の礼での葬儀しか執行できないので、ほかの皇子との待遇の差別化をはかるため、あえて舎人たちに挽歌詠をさせて天皇への誄に擬したのではなかったか。

妻子・兄弟姉妹の挽歌詠が基本としたが、有力な皇子たちについては宮廷歌人による挽歌詠が優先された(8,9,12,14,20,22)。これが行われる場合は、妻子・兄弟姉妹の挽歌は披露されない。非血縁者が挽歌を詠んだ例もわずかにあるが(51,52)、これは遣新羅使の任務遂行中だからである。遣使中は節刀を与えられる立場で、戦闘中と同じ扱いになる。挽歌は、他者に託すほかなかったのである。

もとより、故人を葬るにあたり、参列者の多くが悲しみのうちに挽歌を心に思い、葬儀ののちも遺族に対して数多くの挽歌を捧げるであろう。しかしそうした私的な場面、つまり公開される葬儀の場以外の時日・場面で個人的に捧げられた挽歌などどこにも残りえない。そうした私的な挽歌が残る場合は、文中に記した通り、それぞれの説明がつく。たとえば不倫関係(11)・刑死(1,38)の場合は、公開された場で披露できるものでない。行路死人・伝説的美女など(15,21,23,18~20,34,35,47,48)への挽歌捧献は儀礼的な作歌であって、他者が見守る公開の場で行なわれて筆録されたのかもしれない。ただし死没の直後というような緊張感が窺えないので、詠んだ本人の手元に歌が残されていたのかもしれない。

以上の検討は、詠者の人間関係を歴史的に見たもので、挽歌の歌詠内容そのものを検討するという基本的な作業を怠っている。また挽歌の内容によってさらにグループ分けして検討することもしていない。その意味で、はなはだ不備がある。とはいえもともと筆者は、そうした作業をしていく学力に乏しい。歴史専攻サイドからのまた一視角のみでの検討にすぎないが、共同研究での役目をひとまずおえることとする。

注①井上さやか氏「『万葉集』にみえる『挽歌』および死者儀礼に関する語(基礎資料)」(第二回万葉古代学研究所主宰共同研究・発表資料)の記載によると、「集中の『挽歌』」218首、「歌の題詞としての『挽歌』」11首、「左注の『挽歌』」9首の合計は238首となる。

②拙稿「額田姫王と十市皇女」(『古代史の異説と懐疑』所収)。笠間書院刊。

③拙稿「十市皇女」(『古代の神々と王権』所収)。笠間書院刊。

④拙稿「元正女帝の即位をめぐる」(『白鳳天平時代の研究』所収)。笠間書院刊。